星のない街路

北杜夫

中央公論社

星のない街路 ©一九六九年 検印廃止
定価四五〇円
昭和四十四年十一月五日初版印刷
昭和四十四年十一月十五日初版発行
著者 北杜夫
発行者 山越豊
発行所 中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話(五六一)五九二一(代)
本文整版印刷 三晃印刷
カバー・扉 大熊整美堂
製本 小泉製本

目次

河口にて …… 5
星のない街路 …… 25
人工の星 …… 53
異形 …… 125
浮漂 …… 153
不倫 …… 219
薄明るい場所 …… 235
あとがき …… 271

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

小説集

星のない街路

河口にて

遠くから幻聴のようにかすかな鐘の音がきこえ、それは断続的にずっと以前からきこえていたようで、あれは何かなと意識の片隅で私はいぶかった。その間にも私はせかせかと緻密に銀白色にひかるメスや鉗子を並べ終り、そしてふりむくと、手術台と思っていたのが非常に古風な黒ずんだ木製の寝台で、そこに亜麻色の髪をした少女が毛布にくるまってじっと仰向けになっていた。ほそおもての顔がなんとも蠟のようで、少女はそのまま瞠いていた目を閉じ、閉じてしまうと、その瞳が何色をしていたのか私にはもう思いだせなかった。手をのばして毛布をめくると、すぐに真白な腹部が見え、手術野がすでにガーゼで四角く区切られていて、その薄い皮膚の上にごくわずかメスを触れただけで、柔かい刺身でも切るみたいによく切れ、そのうちに少し太い血管にあたったらしく、血が玩具の噴水のようにほとばしって、それがちっとも赤くないのを私はまたいぶかしく思った。鉗子ではさんでも、じわじわした出血はなかなかとまらず、それでいて私はやはりのろのろと手を動かし、筋肉の層を切りひらいていって、ようやく白っぽい腹膜があらわれ、ごくそっとメスの刃先でなでると、ぽっかりとうすぐらい腹腔があき、中にはうねうねした腸など少しもなく、手を入れて探ってみると、奥のほうになま暖かい肉塊が指先に触れた。そのぬるぬるした奴をひきだしてみると、それは小さく丸まった胎児で、どすぐろい血塊があちこちにつき、それでも顔のへんを見

れば、ちゃんと一通り目や鼻がついているのだった。その塊りは初めぴくぴくしていたが、やがて私の手の中で動かなくなり、生暖かかった体温が見るまに冷えてゆくのが感じられてきた。私はその死んだ肉塊を抱いたまま、蠟のような少女の顔をのぞきこんだが、これも目をつぶったまま呼吸を停止しているようで、このときになって私ははじめて愕然として目を覚ました。

「ドクター」

そう呼ぶ声は薄闇の中からひびいてきて、気がつくと私は船室の狭苦しいベッドの上に横たわっており、慌ててカーテンをひくと、つい今しがたの夢の中の顔のように、色のない、しかし髭だらけの男の顔がのぞいていて、その男はもう一度ためらいがちな声で私を呼んだ。

「ドクター」

自分のものでないような手足を無理に動かして上段のベッドから辷りおりると、室内はへんに暗く、白っぽい朦朧とした明るさのみが丸窓に見えるばかりだった。

「ドクター、吐気がするんで」

その男は、そうした薄明りの中で、なんだか現実のものとも思えず佇み、どこか喘ぐような声でそう言った。昨夜、私は机の上のスタンドも消して寝たらしく、室内にはわずかに船窓からの心細い光がながれこんでいるばかりで、その男の顔も辛うじてうすぼんやりと見わけられるだけであった。ようやっと灯りをつけると、顔だけはよく知っている若い機関部員が片手で胸をおさえるようにして立っていて、無精髭の生えた顔がおどろくほど血の気がなく、冷汗さえ浮べている様子で、私は頭をふって無理にも眠けをはらいのけようとした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

このわずか六百噸のマグロ調査船が日本を出てからもう三ヵ月にもなるが、欧州の港に寄りだしてから積みこむ水がわるく、吐気を訴える者が幾人もいて、船医である私は余分に薬を調合してすぐ渡せるように用意しておいたりしたが、この男のは一目見ただけで程度がひどそうで、口をきくのも苦しいらしく、とても内服薬ではおさまりそうになかった。私はとりあえず男を形だけのソファーに横にしておいて、隣りの治療室にはいって行き、あれこれと注射薬の箱を捜してみた。まだ私は頭がはっきりしてこず、どの薬にしたものか容易に考えがまとまらず、それでもやっと一本のアンプルを見つけだして、それを男の腕にぎくしゃくと注射をした。男は冷汗をうかべていて、とてもこの程度の注射では収まりそうもなく、さてこのあとはどうしたものかと私は朦朧とした頭で懸命に思いめぐらした。ところが、まだ注射した部分をもんでやっているうちに、男は急に、ドクター、だいぶよくなりました、と、さっきから比べると別人のような声で言い、額の汗をぬぐった。いくらなんでもそんなに早く薬が効く筈もないので、私はもうしばらく横になっているようにすすめたが、男はもう大丈夫のようだと不器用に頭をさげ、そのまま船室から出ていってしまった。

男が行ってしまうと、やっと私は本当に目が覚め、寝巻一つで動きまわっていたのでしきりに寒く、思いついて下のベッドをのぞいてみると、同室のサード・オフィサーは当直でブリッジに行っているらしく寝床はからで、私は一人で寝巻一枚のままほとんど身震いしているのだった。暖房はあったが暖かいとはいえず、私はヒーターのコードを急いでさしこんだ。壁の時計を見るとまだ六時で、もちろん夜はまだ明けきっておらず、しかも丸窓から見れば霧一色で、船が昨夜から少しも動いていないことは明らかであった。私はしばらく寝巻一枚のまま、ニクロム線がまっかになって

きたヒーターの上にかがみこんでいた。船に寝巻はいかにも似つかわしくなかったが、この船は水産庁の漁業調査船で身だしなみなどかまわずに済んだので、私はずっとこれを着ていた。日本を出てから、もうかれこれ三ヵ月を越しているのにまだ一度も洗っていず、垢でよれよれの有様で、私は今度こそ洗おうといつも考えているくせに、洗濯日がくるときまってわざとしたように忘れてしまうのだった。そして、そんなよれよれの寝巻一枚では、いくらヒーターの上にかがみこんでも、背中から足まで一面に寒く、それでも私はなんだかこうしているより仕方がないという気がして、頭の隅でしきりと何事かを考えようとしていた。吐気のする病人のこと、夢の中で胎児をとりだした少女のこと、一切が曖昧で、そのほか私は、この数年間に起ったさまざまのこと、それこそ実に些細な事柄までを、ほんのわずかな時間のうちに憶いだし反芻していた。山で崖から墜落するときは、ほんの一瞬に過去の出来事がめまぐるしく頭に去来するというが、それもまんざら嘘でなさそうだと、私はそんなことを奇妙に真剣に考えこんだりした。

それにしてもやはり寒く、私は腰掛けの隅に丸めて投げだしてあったシャツやズボン下をそろそろとつけはじめた。まだ眠かったが寝床にもどる気はせず、心のどこかがせかれるようで、私は服を着終ると、べつに当てもなく部屋を出、後部のハッチから上へあがっていった。後甲板に出てみると一面の霧で、空を見ても海を見てもただ白いばかりで、どこまでが海なのか区別もつかず、いや、海というよりもここはまだ河口の筈で、冬のアントワープの港を出港してから丸二日かかって船はまだ海へも出ていないようだった。

船は、海と河とがいりまじった、霧を映した白い水面にどうすることもなく錨を入れて浮び、ブ

リッジの方角を見あげると、リバー・パイロットを呼ぶ青い灯がぼうっとともっているのが見えたが、そんな光は陸までとどく筈がなく、陸なぞどこにあるのか見当もつかなかった。静かで、霧だけが音もなくうごき、佇んでいる私の前をこまかい水滴が煙のながれるように動いてゆくのがわかった。もう夜は明けている筈で、白っぽい光が霧とからみあい、この小さな船の全貌だけはたしかに見渡せた。はるか遠くで霧笛がきこえ、すると今度は思いがけない近くから、年老いた神話の巨人のうなるみたいに太い霧笛が湧きおこってき、それはたしかに湧いてくるというより表現しようがなく、同じように幾重にも織りかさなった深い濃霧の中へ消えてゆくのだった。それから鐘を叩く音がきこえた。どうやらこの濃霧の中を動いている船があるらしく、急にあちこちから霧笛と鐘の音が湧きおこり、それはお互いの船同士で所在を知らせあうものなのだが、いかにも地球の涯のもの音のごとく沈んでひびき、鐘の音はかすかなだけに余計もの悲しくきこえ、それらの音が消えていくと、あとには漠々とした濃霧と静寂だけが残った。ふいに、私の船も霧笛を鳴らした。それは耳のすぐ間近なだけに、とびあがるほど大きくとどろき、鳴り終ってからもしばらく鼓膜がじいんとし、私は思わず苦笑いをした。そのときブリッジに人影がうごき、厚いオーバーに身をかためた不恰好な当直の甲板員が出てきて、ブリッジの後方につるしてある鐘をせわしく叩きはじめた。これもかなりやかましく響き、しかし鳴り終ってしまうと、すぐに、こわいような困惑するほどの静寂がきた。

オーバーも着ていない私はようやく寒さを覚え、夢の中の動作のようにタラップをおりて自分の船室に戻っていった。このぶんでは船はいつ動きだせるのか見当もつかず、一体フランスの港に着

くのはいつになるのか推測もできず、そしてそのフランスの都会には、私の古くからの友人が病気で寝こんでいるようであった。

彼は高等学校以来の友人で、三年ほど前からフランスに留学しているのだが、もうとうに奨学資金もきれている筈だのに、一体どうして暮しているのか、おそらくひどく貧乏していることだけは間違いなかった。お互いの無精からずっと文通もとぎれていたのを、私が航海に出てからようやく連絡がとれるようになり、その後は港ごとに便りを交しあい、私はなによりも彼と会うのを心待ちにしていたのだった。ところが先日寄ったオランダの港で、私はいつものようにこまかい字がぎっしりと書きこまれた手紙ではなく、ごく簡単なそそくさとした絵ハガキを受けとり、それによると彼は病気になっていて、そのハガキも彼のところにちょいちょい遊びにくる女の子に出してもらったものらしかった。その女の子というのは、リスボンの生れで、まだ十四歳とかいうことで、彼のアパートの近所に母親と二人だけで住んでおり、どういうものか彼のところにしげしげと遊びにくるそうだが、近ごろ彼が交際している人間はほかにほとんどいないようだった。彼女は自分のアパートの部屋にいろんな小さな動物を飼っていて、たとえば二十日ねずみを机の上に出してやるとコップから葡萄酒をのむとか、亀の子を三階の窓から落してしまって甲羅にひびがはいったがセロテープを貼ったら癒ったとか、そんなたわいのない可愛らしい話をしては帰ってゆくらしかった。彼の手紙は、その女の子の話のほかはたいてい陰気で、冬の欧州の気候そのままに暗く湿っていて、私はまだ見ぬ冬のパリの憂鬱さや、彼の住んでいる部屋の薄暗さまではっきりと想像することができた。手紙には書かれていないところまで、私には実によく想像でき、それによると彼の部屋は古

びたアパートの四階で、くらいすりへった木の階段を、ぐるぐるまわりながら実に長いこと登っていったどんづまりにあり、滅多に外出もしない彼は小さな机にむかって表紙のすりきれた本をひらいたり、隣りについているごく狭い台所へ行って湯をわかしたり、ベッドに腰かけたまま長っぽそいパンを割って噛ったりしている筈だった。しかし、いま彼は起きあがることもできず、やせこけた顔をしてぎしぎしきしむベッドに横になっており、そのリスボン生れの少女がまったく途方にくれた顔つきで、なんと話しかけたらいいかもわからずそばに腰かけているのかも知れなかった。きっと医者にかかろうにも金がないのだろうし、それなら私が一刻も早く行ってやって薬を与えねばならなかった。それなのに、この濃霧(ガス)のため船は身動きもできず、ベルギーのアントワープからフランスのル・アーブルまで一日足らずの距離なのに、アントワープでは出港が四日も遅れ、やっと出港してみてもふたたび襲ってきた濃霧のために、二日かかってまだ河口にとどまっているという有様なのだ。

アントワープで出港がのびている間に、私は次第に彼のことが気になりだし、どうもただの風邪なんかではなさそうだという予感がしきりにした。この霧はもう幾日も幾日もつづいていて、地元の人の話では三十年ぶりとかということで、河口には出てくる船と入ってくる船とが数十隻ぎっしりかたまっているに違いなく、いつになったら港を出られるのか見当もつかなかった。昼間は待機のために上陸は禁止され、夕刻になるとその日の出港は延期ときまってようやく上陸が許されたが、もうとうにベルギーの金は使ってしまっていて、夜の街にあがっていっても大して面白そうなこともなかった。それでも私は毎晩、霧のふかくたちこめた街へ出てゆき、自動車のヘッドライトが黄

いろくにじみ、街灯が同じように列をなしてにじむのを見ながら、ふらふらと一人、オーバーの襟を立てて歩き廻るのだった。駅前の繁華街までくると、私はいざというときのためとってあった一ドル紙幣を一枚だけ、一、二枚の絵ハガキを買ってベルギー・フランにかえ、そのあと映画の看板を眺めたり、本屋のショウウインドウの前に佇んだりした末、すいていそうなカフェーをさがし、一杯のビールを頼んでできるだけ長い時間をすごすのが毎夜のことだった。私は病んでいる友人のことを考え、この霧さえなければ今ごろは彼の部屋に着いているだろうにと思ったり、ひょっとすると彼はそのリスボン生れの少女に恋心みたいなものを感じているのではあるまいか、いや、相手はなんといってもまだ十四歳の少女なのだからな、いやいや、こちらのチーズを食べる彼女らはずっと発育がいいのだから、十四歳にもなればけっこう一人前の女なのかも知れないな、などと愚にもつかぬ考えにふけったりした。それから、残った金を計算してからもう一杯だけビールを頼み、それを半分ほど飲むころにはふしぎなほど酔っていて、自分は一体どうして今、こんな場所に、一人ぽつねんと坐っているのだろうと、信じられないいぶかしい気分にさえなってくるのだった。私はこれまでに見た港々や、汽車に乗って旅行したいくらかの土地の記憶を思いだそうと努めるのだが、それらはもうこんがらがり、まぜこぜになって、見てきた絵画や彫刻なども同様で、すべて霧に包まれたようにぼやけていた。カフェーの店内には、おっとりとした家族づれや、笑いあいながら杯をあけている愉快そうな連中もいたが、隅のほうにひっそりと、一杯の茶を前にして造り物みたいにうずくまっている鳥に似た顔つきの老婦人もいた。彼女は実に長いことカップに手をふれずにじっと坐っており、おそらく家へ帰っていっても人けのない自分の部屋で希望のない夜を過ごす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.